

研究 2：校内研究における助言者の発言割合の変化

センター客員講師・信州大学教育学部講師 村瀬 公胤

1. 仮説

分析の前に、つぎのような仮説を立てた。

仮説1：「校内研における助言者の発言は、初期ほど多く、しだいに減る傾向を見せるだろう。なぜならば、初期には教師間に校内研についての共通理解や経験の蓄積がないため、助言者が主導する場面が多いと考えられるからである。」

この仮説に基づき、本調査ではプロトコルの文字数をカウントすることによって発言の量とみなし、測定および分析を行った。

2. 分析 1

1999年9月17日～2002年3月5日の期間、全26回について、全発言の文字数とS氏の発言の文字数をカウントし、講師の発言の割合(%)を算出したのが(表1)である。

表1：分析対象の授業データおよび校内研における発言数

授業ID	授業日	科目	全発言の文字数(A)	助言者の発言の文字数(B)	助言者の発言占める割合(B)/(A)
1	1999.09.17	図工	21915	9118	42%
2	1999.11.18	家庭科	14153	9063	64%
3	2000.05.25	理科	27052	8014	30%
4	2000.05.25	国語	29747	5303	18%
5	2000.09.21	国語	25456	10197	40%
6	2000.09.21	国語	25104	12876	51%
7	2000.09.21	国語	25593	15735	61%
8	2000.12.01	理科	20212	6188	31%
9	2001.01.18	生活科	26720	7675	29%
10	2001.01.18	音楽	27344	13512	49%
11	2001.04.26	算数	8885	2116	24%
12	2001.04.26	図工	17704	4625	26%
13	2001.05.24	算数	31321	13177	42%
14	2001.05.24	算数	22424	7557	34%
15	2001.06.28	理科	20509	6190	30%
16	2001.06.28	算数	22415	6263	28%
17	2001.07.13	国語	23836	9458	40%
18	2001.07.13	国語	30553	9288	30%

19	2001.12.06	国語	32939	19268	58%
20	2001.12.06	国語	27467	14989	55%
21	2002.01.17	家庭科	35692	12567	35%
22	2002.01.17	社会科	35433	13004	37%
23	2002.02.04	社会科	29450	10641	36%
24	2002.02.04	体育	37392	15444	41%
25	2002.03.05	理科	20796	7102	34%
26	2002.03.05	算数	22508	5220	23%

上のデータに基づき、時系列に沿ってグラフ化したものが(図1)である(横軸の数字は上の表のIDと対応している)。

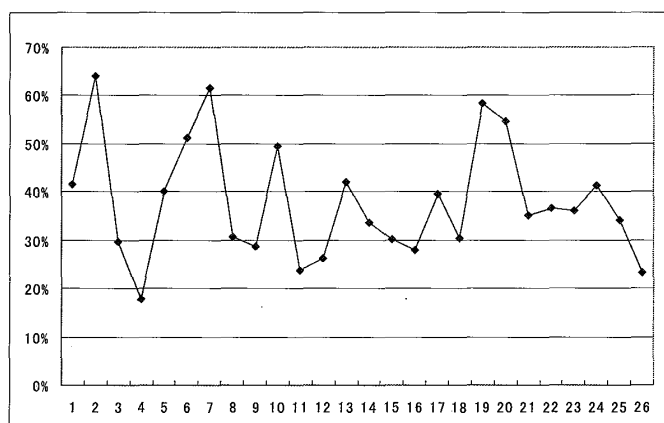


図1：助言者の発言の割合の変化

このグラフからは、必ずしも仮説1に沿うような傾向は見えにくい。わずかに減少する傾向も見えなくはないが、むしろ個々の回の振幅のほうが大きいと言える。

3. 分析 2

上述のようにデータは回ごとの振幅が大きいため、これをならすために分析1のデータを時期に分け、その平均値を比較することをつぎに試みた。学期の区分とサンプル数のバランスを考慮し、(表2)のように前期・中期・後期の3期に分けた。

表2：校内研の時期区分

前期	1999.09.17～2001.01.18
----	-----------------------

中期	2001.04.26～2001.07.13
後期	2001.12.06～2002.03.05

この各期について助言者の発言の割合の平均値を求めた結果が、(図2)のグラフである。

ここでは仮説1に反して、V字形の変化が認められる。

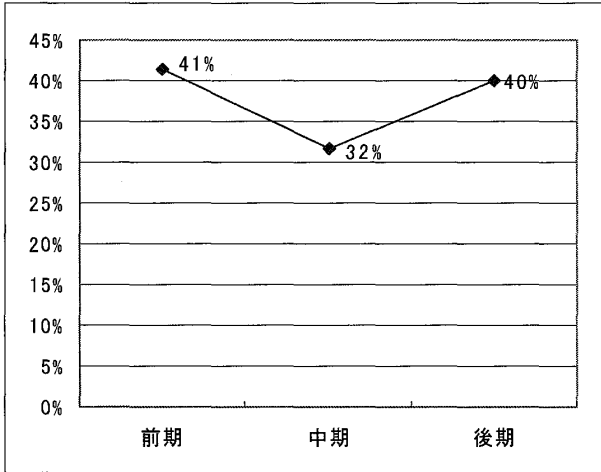


図2：時期別によるS氏の発言割合

4. 中間考察

分析1, 2で見たように、時期を追って助言者の発言はしだいに減るといふ仮説は成り立たないと推測される。では、年度ごとではどうであろうか。年度当初は助言者の発言が多く、しだいに減り、新しい年度になると新任の先生を迎えてまたりセットされるようなサイクルが考えられるかもしれない。

仮説2：「年度の前半は助言者の発言割合が高く、後半は低い」

5. 分析3

仮説2を検討するため、分析1のデータを並べ替え、夏休み前と夏休み後に分けた。ただし、ここでデータの授業ID1および2は、当該年度の夏休み前がないことを考慮して分析対象からはずし、残りのサンプル数24(表3参照)を対象に分析した。

表3：夏休み前と夏休み後の授業区分

	授業ID
夏休み前	3-4, 11-18
夏休み後	5-10, 19-26

それぞれの平均値および最小値・最大値は、(図3)のとおりであり、仮説2とは逆の結果となった。夏休み

前の最大値でも夏休み後の平均値と等しいくらいであり、夏休みの前と後では夏休み後のほうが助言者の発言割合が高い傾向にあることがわかった。

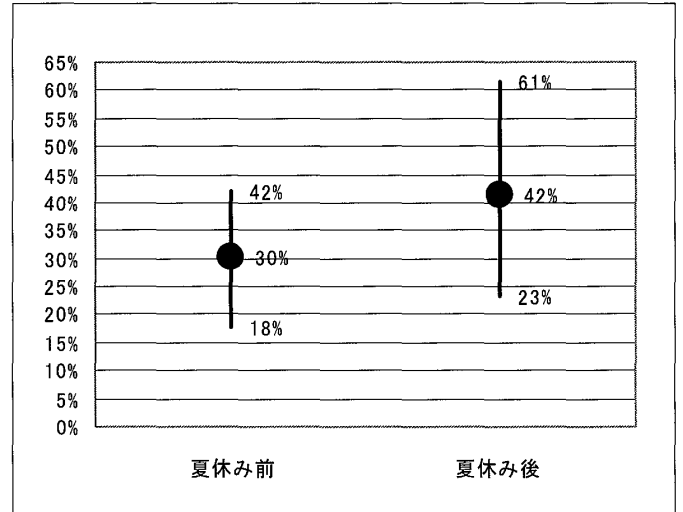


図3：助言者の発言割合 (平均値・最小値・最大値)

6. 総合考察

以上の分析結果より、仮説1および2は棄却されるばかりでなく、むしろ逆の傾向もあることがわかった。この結果をふまえながら、校内研における助言者の役割について以下に考察しよう。

分析1からわかるように、校内研の会話は回によって差が大きい。浜之郷小学校の場合、形式が細かく決まっておらず、その日の授業の具体的な問題に合わせて助言者であるS氏の即興によって組み立てられる部分の大きいことを考えれば、とうぜんと言えるかもしれない。このダイナミクスが、分析1の結果に現れたと考えられる。

つづいて分析2の結果は、解釈が難しい。V字形の傾向といえども、統計的な意味については疑問符がつく。ここでは、助言者の発言割合だけに注目するよりも、授業者の発言割合やそれ以外の参加者の発言割合などと総合的に見ることによって、V字形の意味も考察できるのではないかと考えられる。この点については、別稿に譲る。

最後に分析3の結果だが、これだけを見て、助言者の主導性が年度前半より後半のほうが高いと解釈するのは無理があるだろう。そうではなくて、助言者の主導性の現れ方の差異であると考えなければならない。

たとえば、年度の前半に助言者が前面に出ると、助言者の語り口が教員の語り口を規定してしまったり、助言者に頼るような校内研のディスコースが形成されてしま

ったりするおそれがあり、それを避けるために発言数を抑制している可能性などが考えられる。他方、年度の後半には安心して議論できる空気がすでにできているなかで、助言者も積極的に授業について発言することが可能

になっているのかもしれない。

こうした可能性について、発言の内容を質的に分析しながら検討することが今後の課題となるであろう。